



## report 01 新潟水辺シンポジウム 2013 開催レポート

新潟水辺シンポジウム 2013 は、「子どもたちが楽しみ、挑戦できる水辺に」というテーマを掲げて、12月7日(土) 13時30分より新潟市のクロスパルにいがた4階映像ホールにて、71名の参加者(登壇者、スタッフ含)を得て開催されました。今回のシンポジウムでは、サブテーマを～第1回・子どもの川遊びが永続できる条件づくり 事始め～としていますが、第1部に「若者にとっての水辺の魅力と親水環境づくり」、第2部に「大人のすべき水辺舟利用の条件づくり」という二つのパネルディスカッションの場を設定して、話し合いを展開しました。

大熊 孝 代表は開会挨拶で次のように語りました。「水辺シンポジウムは数年間、鮭と川を考えることで進めてきたが、昨年は水辺のまちづくりを考えたので、今年の水辺で子どもたちをどうやって育ててゆくかを考えてみたい。」・・・(今年度の活動報告を省略)・・・「信濃川の流量が増えたことは、鮭の遡上だけでなくラフティングを楽しむことも可能にした。今年国交省が危険なブロックを除去してくれたが、水で遊ぶことに理解を示してくれるようになったことに、姿勢の変化を感じる。」、そして「大熊代表が提起する“川の定義”を説明した上で、川は人を育てる場である・・・今日はそれについて議論したい」と結びました。(“川の定義”はホームページで紹介しています。)



次に、ご多忙のところを駆けつけていただいた篠田 昭 新潟市長から、激励のご挨拶をいただきました。(市長は挨拶後に退席)ご挨拶の中には次のような言葉がありました。「水辺環境の改善と水と親しむ活動に尽力いただいていることに感謝している。(中略)通船川(河口の森)では、皆さんの活動を受けて、トイレ設置等の検討に着手をはじめている。新潟市の水辺に関しては、鳥屋野潟の整備も始まるので、今後は潟に学び潟を楽

しむ活動に取り組んでいきたい。」

パネルディスカッションの第1部「若者にとっての水辺の魅力と親水環境づくり」は、コーディネーター佐藤 哲郎(事務局長)、サブ・コーディネーター戸枝 邦子(世話人)の進行で進めましたが、第1部のパネリストとして①大熊 美桜さん(金沢泉丘高校1年、吉野川「川の学校」スタッフ)、②塚野 卓郎くん(万代高校2年、端艇部)、③太刀川 舞さん(万代高校2年、端艇部)、④小林 史社くん(万代高校2年、端艇部)の4名の方々が登壇し、次のような発言をおこないました。



① 大熊 美桜さん・・・中2のときに「川の学校」に参加して、今年から高校生スタッフとして活動に加わっている。「川の学校」(2001～)は吉野川の5カ所で15日間のキャンプをして、川の楽しさを伝え、「川ガキ」を育てる活動を続けている。

野田知佑・校長の言葉で最も印象に残っているのは「川の学校では君たちは自由だ。何をやってもいい。」という言葉だ。川で好きなことを見つけて、思いっきり楽しむことができるようになってゆくのがいい。

川で遊んでいるうちに、どういうところが危険か、どんなところに魚がいるか、教えてもらわなくともわかってくる。

高校生スタッフは、自分自身が川で思いっきり楽しむ「川ガキ」に近いし、川の表情や生き物を良く知り、川を楽しむことを知っている大人がいて、そういう人たちに憧れて私はスタッフになった。

私の住む金沢にも、全身川に入って遊べるきれいな川があったらいいと思うが、そういう川は無く、子どもの頃から危険と言われて遠ざけられてきたように思う。

金沢市内には犀川と浅野川が流れているが、浅くて

## ■水辺レポート



Photo by Takayuki Nakamura  
吉野川「川の学校」 おもいっきり自由を楽しむ子ども達  
(撮影：川の学校 中村隆之氏)  
段差があり、舟には乗れない。石川県内では、手取川が大きくきれいで、川の活動もあると聞いているので、行ってみたい。

② 塚野 卓郎くん・・・端艇部には、他の高校ではできない経験ができると思って入部した。カヌーにはカヤックとカナディアンがあり、漕ぎ方も違う。

はじめは乗れなくて、何回か落ちて全身濡れて、乗れたときは達成感を感じた。早く漕げるようになり、自由に操れるようになったと実感したときに、また達成感を感じることができる。

通学路として通船川を見て育ってきたが、カヤックに乗って川から見る風景はぜんぜん違って見えた。魚が水面を跳ねたり、亀が顔を出していたり、ブロックの陰の小魚などの発見もある。

端艇部の経験で川を身近に感じる事ができたが、たくさんの人々の関心が川に向くように、カヌー体験などの活動を広げるべきだと思う。

通船川で漕いでいると黒いヘドロがモワッと浮きあがってくる。きれいな川になってほしい。はじめは川に落ちたときに水を飲んだが、慣れると落ちても飲まないようになった。

日本には吉野川のような川があるんだなーと知って、卒業後はいろんな川で漕いでみたいと思っている。

③ 太刀川 舞さん・・・端艇部には、好奇心と新たなことに挑戦する気持で入部したが、子どもの頃に母に連れられてカヌー体験をした記憶が、動機のひとつとなっている。子どもの頃の体験の影響は大きいと思う。

カヤックは体全体を使って乗る必要があり、落ちては乗るを繰り返して、乗れるようになったときに自信がついた。

栗ノ木川の桜まつりに参加したときに、道路からは気づかなかった川からの風景に感動した。

卒業後は、普通に暮らしていたらカヌーに関わることは減ると思うので、川と関わった経験を活かして、川に関する行事などに参加したいと思う。

自分が親になったら子どもに川のことを教えたり、川とふれあえるようにしてあげたい。

通船川の川底には何があるかわからないと先輩たちから言われている。突き出ている鉄筋で足を切ったこともある。感染などが心配だ。

子どもが遊ぶためにも川の環境は重要だ。きれいで危険の少ない川なら親も安心できる。

④ 小林 史社くん・・・他の高校に無い部活なので興味を感じて入部した。卓球をやっていたが諸事情(?)によりカヤックを漕いでいる。

カヤックは慣れてくると本当に楽しい。楽しいけれど難しさもあって、奥の深さを感じている。

川から見る風景は陸上とは違っている。建物など遮るものが無いので、月がとても綺麗に見えることがある。

大会にも出ているので、より速くうまく漕げるように取り組んでいる。



通船川で競技用カヌーの練習する万代高校端艇部

卒業後は部活動の経験を活かし、川に関する行事があれば積極的に参加したい。

私は下痢をしたことがないが、通船川の水で下痢になった話は聞いたことがある。川底にはヘドロに混じってガラスの破片や木片があるので、不用意に足をつくことができない。沈んでいる危険物は怪我の恐れがあるので、無くしていければと思う。

通船川が子どもも遊べるような安全な環境になることを願っている。吉野川の「川の学校」の存在を知り、自由な感じがとても羨ましいと思った。



パネルディスカッションの第2部「大人のすべき水辺舟利用の条件づくり」は、コーディネーター相楽 治（副代表）の進行で進めましたが、第2部のパネリストとして①石田 昌知氏（万代高校教諭、端艇部顧問）、②安澤 裕志氏（NPO 法人ねっとわーく福島潟 事務局長）、③谷田健六氏（とやの潟を育む市民の連絡協議会 会長）、④横山 通（NPO 法人新潟水辺の会 通船川環境事業部 部長）の4名の方々が登壇し、次のような発言をおこないました。



① 石田 昌知氏・・・万代高校・端艇部は、通船川の山の下排水機場の付近が主な活動の場となっている。部員は12名（女子3名）。

ほとんどが高校に入って初めてカヌーにふれた生徒だ。ポリ艇からはじめてレース用のカヤックに乗るまで、1～2か月かかる。

レース用に乘ったとたん転覆する生徒が多い。水を飲まないように指導しているが、水遊びに慣れてない生徒は飲んでしまう。目がものもらいになりやすいようだ。

通船川を利用している理由は、近くて目が行き届くことと閉じられた安全な水面だからだ。水質を度外視すれば通船川が最適だ。

万代高校の端艇部員は、川に落ちたくないのも、レース艇に乗れるようになるのが他校より早い。しかし、慎重に乗っているのも、スピードが上がらないようだ。

私は笹川流れの近くで育ったので、海や川で遊んでいたが、地域の大人たちが見守る視線を感じながら遊んでいたという感覚がある。吉野川の「川ガキ」の存在は、昔は当然の姿だった。

通船川に艇庫ができると聞いているが、そこに何艘かの舟が用意されれば、子どもたちに体験を広げる器はできると思われる。

しかし、安全を見守り指導する大人の目が必要になる。わが端艇部員、部員のOB・OG、その他経験ある大人の活用ができれば良いと思う。

② 安澤 裕志氏・・・現在62歳の私より少し上の世代

は潟で遊んでいたが、私が小学生の頃から学校にプールができはじめ、川で遊んではいけないという文化が変わってきて、舟からも離れてきた。

私たちにもう一度潟で遊びたいという思いが募りはじめ、それが環境教育の一助になればいいと思った。

どうせやるなら自分たちで楽しみながらやろうと、自分たち流で潟舟を6艘造った。技術が無い私たちは、舟釘でつなぐところをビスどめにし、板に防水シート貼りまた板をはって簡略な方法で造ってみた。

福島潟でその舟を使って、高校生とともにオオヒシクイの餌になるマコモの植栽、ホテイアオイの駆除などを行い、毎年4月には地域住民・小中学校とともにクリーン作戦を行っている。流入河川があるのでゴミは多い。舟体験は、一般運行が年間15日間（GW、夏休み、9月）20回で、乗舟者1,045名、小中学校潟舟案内が4校、225名に陸と水面から潟体験をしてもらっている。



大人自ら楽しもうとスタートした  
ねっとわーく福島潟の潟舟体験

水面からの視線の素晴らしさを知っていただき、自然を考えたり潟のファンになっていただけたら嬉しい。体験者増と自然保護の調和、安全の確保、船頭の確保が課題となっている。

③ 谷田 健六氏・・・鳥屋野潟で舟を見なくなって、今は葦が伸び放題、ゴミは捨て放題の状況だ。

鳥屋野公民館で活動するいろんな団体と連携して、鳥屋野潟の環境を変えていきたいと取り組んでいる。

県の築堤整備計画に、勾配や遊歩道などに関する要望を反映することができたが、今後は3箇所に整備予定の公園について、それぞれ特色を持った公園とするように提案してゆく。

これからの鳥屋野潟のあり方については、「自然を豊かにする」、「親水機能を高める」、「学習と体験の場にする」、「安全性を高める」という視点から提案していき

## ■水辺レポート

たい。

子どもたちからは、舟に乗ってみたい、釣りをしたいという要望が多い。本能的にそうした欲求があるのではないかと感じていて、叶えてやる必要もあると感じている。

大人は遊べる環境を整備し、湯の恵みを食すなど、体験付加価値と環境認識を深めてゆけるようにしたい。

都市の中の湯という全国的にも珍しく貴重な存在の鳥屋野湯を、愛し活用していきたい。

### ④ 横山 通・・・川面に人の花を咲かせたい。

新潟市民は二世代にわたって川に背を向け、川で遊ぶことを忘れてきた。これからは少しずつ川に目を向けてもらう必要がある。

私たちは川清掃とカヌーによる川遊びを続けている。通船川・栗ノ木川で、地域住民・子どもたちに体験してもらう舟遊びイベントをやっている。板合わせに乗舟したり、カヌーを自分で漕ぐ体験ができる。

舟に乗せてもらうことと、自分で漕ぐことは大きく違う。できることから経験を広げていきたいと、新潟市内のあちこちの河川でカヌー下りを始めている。(船外機付の救援船がついて)

そして、通船川～阿賀野川～小阿賀野川～信濃川(四河川)をめぐるカヌーツアーも考えている。

市民や子どもたちにカヌー体験を広げるには、カヌーの数ある程度用意しておかなければならないし、指導したり救助したりする先達がいないと川との関わりを再生することはできない。

そのための拠点として、通船川にカヌー艇庫(万代高校端艇部と半分ずつ共同使用)の建設を予定しており、募金活動を行っているところだが、沢山の寄付金をいただいていることに感謝している。

4名のパネリストの発言を受けて、コメンテーターの大熊 孝 代表が次のように語りました。「水辺の会としていろいろやってきたが、それぞれが単発で継続化していない。万代高校は日常的に川で活動しているし、吉野川の川の学校は15日間川に入っている。きちんと継続してやらないと身体に沁み込まない。川の学校は13回やっているが、卒業生がスタッフとして戻ってきて、指導者として循環する仕組みができてきている。通船川の船小屋を拠点とした活動には、万代高校・端艇部の卒業生に戻ってきてもらえると嬉しい。」

第2部の質疑応答で、いくつかの質問と意見が出さ

れましたが、その中には次のような意見がありました。(意見:中村)五泉とげその会では早出川清流スクールをやっている。県内にも荒川などきれいな川があるのに、指導者がいないので、川が活動の場になっていない。川は国や県が管理するものになってしまって、住民が関われなくなっていることも、川から人を遠ざけた原因ではないか。

意見を受けて大熊 孝 代表は、次のように語りました。「川で遊べないようにしたのは土木行政だが、川で遊ぶと言うのは教育委員会である。“良い子は川で遊ばない”という言葉になぜ抵抗できなかったのか。それは我々が英国にあるような“川で遊ぶ”文学を持っていなかったせいだと、私は思っている。英国には、アーサー・ランサムやケネス・グレアムなどが1900年初頭に著した“川遊び”を礼讃する国民的児童文学がある。汚れた川をきれいにし、夏休みに川で遊ばないと気が済まない英国民の心には、少年期に読んだ“川遊び”文学の蓄積があるようだ。100年くらいかかるかも知れないが、川に対する共通の気持を国民全体で持てるようにならないと、川をきれいにしておくのは難しいかも知れない。」

第2部のパネルディスカッションを閉じる際に、コーディネーターの相楽 治(副代表)は、次のように語っています。「今回のシンポジウムのテーマについて、言い出しっぺは私だが、その根底には、私のふるさと“福島<sup>えりゅうでん</sup>の原風景に川が無くなっている”こと、万代高校の江龍田先生の“カヌー少年団みたいなものがあれば”という言葉があった。大人が川で遊ばないのは、川を知らないからだと思う。昔の記憶や技の伝承も大切だが、今日の議論を聴いて、水辺経験者の高校生の皆さんには大人の教育を期待したい。このシンポジウムの議論を積み重ねて、いずれ河川管理者や地域の銀行なども呼べるシンポジウムにしていきたい。」新潟水辺シンポジウム2013は、山岸 俊男 副代表が閉会挨拶を行って、16:50に閉じました。

報告:事務局長 佐藤 哲郎

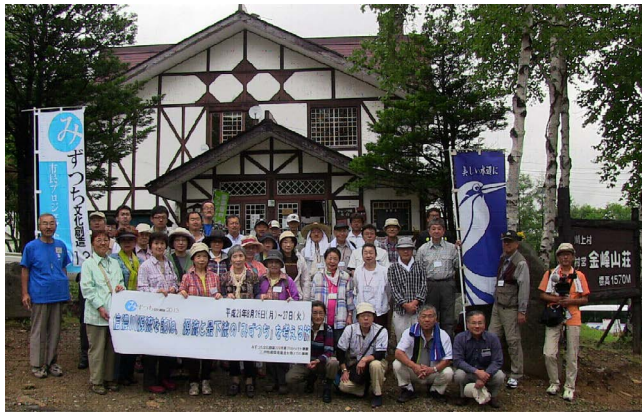
## 第4回 信濃川大河塾に参加して

8月26日(月)と27日(火)に開催された大河塾に初めて参加させていただきました。

今回はJRの飯山線、小海線に乗りして列車上から信濃川、千曲川を体感するというので、添乗という意味もあったのですが、多くの皆様が車窓からの景色を楽しまれたようで安心しました。

信濃川の源流(水源)には以前から訪れてみたいと思っていましたので、実現することができ良い経験になりました。

次はぜひ水源地標地点まで行ってみたいと思います。



源流に向けて出発前、宿泊した金峰山荘の前で今回の旅で考えさせられたのは、川上村の高原野菜畑からの濁水問題でした、事前学習時に想像していたのはもっと大規模な耕作地で機械化も進み効率的な経営をしているものと思っていましたが、現実はその中でも夜間照明の中で、膝にパットをつけて手作業での収穫、箱詰めという重労働であり、収入もそんなに多くはないのではないかと思われました。

たしかにお墓は立派でしたが、レタス御殿が並んではいませんでしたし高級外車もあまり見かけませんでした。

案内してくれた農協の方も誠実な対応で、とても良い印象を受けました。

魚沼地方の米農家と比べてはいけないのかも知れませんが、大型コンバインで収穫し、ライスセンターのサイロに機械的に収納し乾燥も機械がしている様子とつい比べてしまいます。

とある総合農協の執務室は役員がたくさんいて、各自大きな個室があり、職員もゆったりとしたレイアウトの事務室で仕事をしていますので、川上村の農家が恵まれているとは思えませんでした。

川の水質で濁度(SS)も大事な要素ですが、BOD(生物化学的酸素要求量)のほうにも注目すべきであると思います。

気になったのは川上村の地図に3箇所ものゴルフ場があったことです、今は昔ほどではないと言われていますが、美しい芝を維持するためには相当強い農薬が使われていますし、田畑の農薬も含めて、これらが魚類はもとより底生動物、昆虫の

生態には大きな影響を与えていると思われます。

千曲川で藻類が最も発達している地区は上田市付近だそうで、人間活動の影響で水中の肥料分(窒素化合物やリンなど)の濃度上昇が影響していると考えられます。

原因は下水、農牧業、工業排水など多岐にわたり、菅平、塩田平の農業が原因との説もありますが、いずれにしろ人間の生活、営みの結果だと思っています。

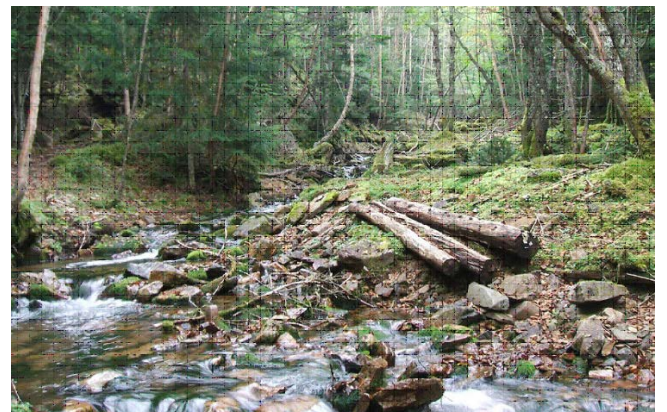
下流部の人たちが豊かで文化的な生活を行いつつ、「上流から泥やゴミが流されてくるのはけしからん」と責めることは可愛そうとは(?)公平ではないように感じます。

まさに、上流部と下流部での交流を通して、多角的に検討し議論をする中で相互理解が得られることが大事ではないかと思っています。

最近、色々な方面で川上村がとり上げられ注目されると、さまざまな反発が出てくると思われますが、がんばって欲しいものだと思います。

岐阜の木曾川の近くに独立行政法人土木研究所の自然共生センターがあります、広大な土地に自然河川に近い、人工水路を作りさまざまな実験、研究を行っています。

先日この研究所を見学し、研究者と意見交換をしましたが、河川環境を悪くした原因は治水ではないのかという話がありました。



信濃川・千曲川の源流からの小川

川は洪水により、淵、瀬、ワンドが形成されるが、堤防で川幅を制約することによりこの幅の中での河川形態であり多様な形態の形成を失ってきているし、護岸により水際の植生等の多様化を損ねていて幼魚等の生息や鳥からの避難場所がなくなっているとのことでした。

河川環境と治水との共存、防災と減災との境界域など難しい課題もありますが、当面、信濃川中流域での河川環境と河川利用の共生や魚類の生息環境の改善、鮭の遡上数の向上等に取り組んでまいります。 よろしくお祈りします。

会員 笠井 高志

## つくり市民会議 (15周年) の報告

ウルサン デファガン

### 通船川・栗ノ木川の再生に向けて —韓国蔚山市の太和江に学ぶ—

「おーい、阿賀野川が切れるぞー、みんな逃げろ」演劇の一台詞である。頃は江戸時代 1800 年代初め新発田藩領内のできごとから始まる。

今年の「つくり市民会議」は、内容と会場が二転三転して、その度に初めから企画し直すこととなり、関係者への折衝を繰り返した。



オープニングの様子

例年のように開催予定の小学校を訪ね、会場及び生徒の発表をお願いしたところ、「今年は通船川関係の学習を実施しないので、当校での開催を遠慮したい」との返事であった。それで次の学校を訪ねお願いしたが、「新校舎へ移転したばかりで、次年度以降で検討させて欲しい」とのことであった。

さすがに3校目は開催順番が早いと対応しきれないことを予想して、内容変更をすることにした。

これまで続いた子ども達の発表はやめて、当会が5月に韓国蔚山市の太和江保全会との訪韓交流した際に得た太和江の水質浄化と通船川の水質について、地域の方々へ紹介することにした。

そんなときに阿賀野川漁協から「子ども達に鮭のつかみ取り体験をやってみませんか」との誘いがあり、すぐに発表会場やつかみ取りした鮭をその場で焼いて食べられる場所などの手配をして、地域の子供達にも喜んでもらえるものと思っていたところ、9月28日の開催日に鮭の確保が難しいのでマスに変更して欲しいとのこと、鮭がマスになっても問題なかった。しばらくして漁協から、その頃は組合員が遡上鮭の捕獲で多忙のため、この度の企画中止の話がもたらされた。

開催日の1ヶ月前である。急遽、会員の星島さんが過去にこの市民会議で地域の子供達と一緒にミュージカル「王瀬の長者」を演じていたので、出演のお願いをしたと

ころ、東区のコーラスグループ桑野さんと演劇大好きな大西さんを紹介してもらった。

直ちに打合せに入り、市民会議の主旨を伝えたところ、演劇は通船川誕生の歴史をテーマに、コーラスは川をテーマにオープニングとエンディングで出演することでまとまった。ところが会場の東区役所の会議室は天井部が開いているため歌や演劇はOUTとのこと。周辺の施設を問い合わせた結果、元木戸病院、現在地域の介護、つどいの広場などになっている「なじよも」の広場と食堂をお借りすることとなった。

市民会議の内容は、15周年を迎え新潟県や新潟市が通船川・栗ノ木川にこれまで取り組んだ様子、韓国蔚山市の水質浄化の話、地域のアーカイヴズ紹介などである。

出席者は会場の施設の方々や地域の方々に80名の参加であった。



演劇「よみがえる通船川」

参加者からは通船川をもっときれいに、太和江のように早くきれいにとの意見が多く寄せられた。アーカイヴズ発表は活動している方の顔と内容が生き生きとまとめられて解りやすかったと好評であった。演劇は通船川協の野外劇を期待する声があった。

会場には蔚山市の子供達の絵画を展示したところ、参加者からは初めて海外の子供達の絵を見たが、色の使い方などうまいなーと感心していた。

絵画は通船川・栗ノ木川の沿川の小学校6校に回覧して、同年代の子供達からも見てもらい、お返しに市内の子供達から絵などを描いてもらい蔚山市へ送って、子供達の絵の交流が始まることを期待したい。

副代表世話人 山岸 俊男



report

## 通船川川清掃、川親水活動 2013 の総括と課題

通船川清掃を始めて7年、川親水活動を始めて3年が経過しました。この経験によって私達は川と人を巡る現在の本質的な課題に打ち当たったように思います。以下、この課題を明らかにすることでこれを乗り越えるための議論の端緒にしていきたい。

通船川清掃は川面のゴミ拾いから始めて今年から川面に浮かぶ長尺な丸太なども引き上げることができるようになってきました。



これは『川掃除隊』として実質的な力量を持ち始めていることを示しています。しかし、川にゴミを少なくするという価値を流域全体の課題と出来ない状態が続いています。いわば川掃除は当分の自己満足にしかっていないのです。

『廃棄物の処理及び清掃に関する法律』がありながら川にはそこから漏れるゴミが集まってくるのです。その漏れるゴミの量が受忍範囲であるのかどうかは流域住民の文化の問題です。

私達はその量が限度を超えていると感じたために川掃除を始めましたがこれを流域全体の課題とするためには川掃除だけでは無理と感じ始めています。

私は川にゴミを少なくすることで稼ぐことができることを流域住民に示すことが必要だと考えています。それが稼ぐ川舟の登場です。

考えればあらゆる川の観光地には稼ぐ川舟と共に川掃除舟がいたのです。簡単には稼ぐ川舟にはならないでしょうが稼ぐ川舟のプロセスが川ゴミ削減のプロセスと重なると考えています。その時期は熟し始めていると思います。

水面があればどこにでも進入できる櫓と船外機ハイブリッド川屋形舟を登場させたい。下記の舟は近江八幡の櫓漕ぎ和船です。これに船外機25馬力を併設し、屋根を下げる機構を設けることで新潟市のあらゆる水路を渡ってゆくことができます。



近江八幡の営業川舟

川舟で稼ぐためには川環境を守ること、新航路の開拓と展開がその必要条件であり、街を語り、見るべき価値の蓄積が十分条件であるとすれば稼げる川舟の登場こそ川と街の再生の目標です。

川親水活動はカヌーを使った親水活動として始めました。



小阿賀野川を下るカヤックとカヌー

カヌーは他人に乗せてもらう舟ではなく、自力で乗る舟だからです。川の中で自分の主体性を回復することができる道具であると考えました。多分それは正しく、少しずつではありますが参加者は増え続けています。

川を自在に移動する楽しみは車で道路を移動す

## ■水辺レポート

る楽しみの比ではなく、自然の懐深く入り込むことで楽しみばかりではなく、人の小ささも実感できます。まるでそれは高山を一人歩む登山者のようです。

一昨年から通船川、栗ノ木川下流から始め、信濃川、阿賀野川、小阿賀野川へと足を延ばしています。



鳥屋野潟南岸とビッグスワン

さらに今年の11月には初めて鳥屋野潟周遊を実施しました。新潟市の中心部にありながら忘れられていた水面を漕ぎ渡ってゆくとかつてここを生活の生業の場としてきた先人の苦勞と想いに触れることができるように感じます。そして改めて新潟市とは川が集まる場所であり、豊かな水面を持つ街であると実感できます。

この楽しみを会員以外にも広げるための社会的資産としてカヌー艇庫の建設を通船川河口の森船着場で始め、カヌー増艇を構想しています。

救助船1艇とカヌー5艇を一つの単位として優しいコースからやや困難なコースまで住民を含めて参加者の力量に応じた川下りを日常的に実施したい。そのことで新潟市には川があり、川と親しむ経験を一般化することで住民と川の間隔を敵対から親しむものへと変えていきたい。

しかし課題もあります。『水質汚濁防止法』と

いう法律がありながら現実の都市河川は汚濁が減少していないのです。

その代表が汚染指標類型D,Eの通船川、栗ノ木川下流です。川と親しむには少なくともC類型に改善することが必要です。しかしこれを拒絶する社会勢力があり、現在対話不可能な状態を続けています。

さらに新潟市の川は効率的な治水、そして道路優先という現在の価値のために分断されています。

鳥屋野潟はその典型です。私達はこれを再び他の川とつなぐことを求めています。川の環境改善と舟航路の展開が川親水文化成立の必要条件だと思います。

川清掃と川親水活動は各々異なった川へのアプローチでしたがこの継続が示した結論と目標は同じものでした。

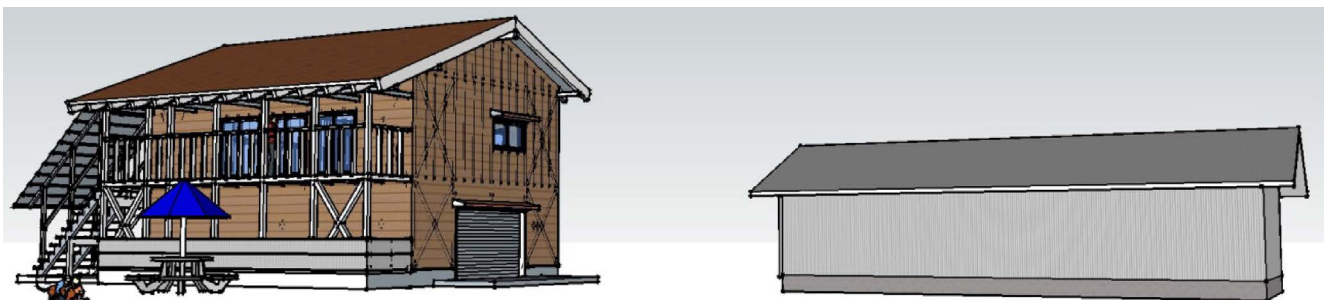
川のゴミを削減し、水質基準を改善し、舟の道をつなげ直す。

これを歴史的に実現出来なかったことが新潟市の限界でした。

21世紀の新潟市がどう自らの出自を肯定し生きてゆくのか？川の街新潟の自画像を自ら描き、肯定し、示すことが私達に求められています。

世話人 横山 通

通船川の川掃除、親水活動は新潟市の「地域活動補助金」、カヌー艇庫の建設は新潟県のにいがたNPOサポートファンド、公益信託大成建設自然・歴史環境基金の助成を受けています。



通船川河口の森船着場の右が現在建設中のカヌー艇庫、左が構想中の休憩室兼多目的倉庫



## 信濃川水系河川整備計画下流部会の報告

1997年の河川法改正(新河川法と略)では各流域の河川整備計画(30年以内の整備工事)に流域住民の意向反映が義務付けられた。それを受けて私は当会から下流部会の委員として参加し、信濃川の上中下流での整備方針や整備計画案について議論してきた。途中、大地震や水害などで中断。H25年に最終的な検討が行われ河川事務所のホームページで公表されている。

※ 信濃川水系学識者会議第4回下流部会の議事要旨は国交省北陸地方整備局ホームページに掲載中  
<http://www.hrr.mlit.go.jp/shinage/shinano-plan/index.html>

### 日本の「大河信濃川」としての整備計画を

過去4回の公開会議では、大熊代表にアドバイスを頂きながら質問や提案、意見を述べてきた。①河川法のねらいは治水・利水・環境・文化、②日本を代表する信濃川の『川格』、③魚と舟が上り下れる川、④水辺に緑陰樹の実現、⑤治水は日頃の知水から、の5点を主な論点・視点として問題提起した。

### ①治水・利水・環境・川文化の4つのねらい

新河川法では治水、利水、環境の3つの命題を満足させる川づくりとしている。川の1本、1本に個性があるのだから川文化を加え4つの命題だろうという全国の仲間との議論結果と、さらにその川文化は治水、利水、環境を包括する概念というつくり市民会議での理念を提案した。例えば、川舟下りでは洪水で移動した消波ブロックが危ない。そこに治水・親水を認め合う川文化の思想が根付いてこそ親水型消波ブロックなどの治水技術が確立できる、という意味である。

### ②大河信濃川としての川づくり

どの国にも、象徴としての山河がある。英国テムズ川、仏国セーヌ川、独国ライン川、中国黄河、韓国漢江というように。日本では大河信濃川がその1つだ。「大河の川格」での信濃川河川整備計画を期待したが私の力不足で明快に提案しきれなかった。

### ③イトヨも上り下りできる下流護岸へ

当然、多自然川づくりは計画方針になった。でも、経済魚ではないイトヨなど(新潟市の食文化にあった

降海型の川魚)の回遊が下流の矢板護岸では遡上が困難と思われるのにその改善策までには踏み込めなかった。

### ④やすらぎ堤にシンボリックな大木を

上下流の整備と同等に重要な川とまちとのつながりの多様な接点、場づくりにシンボル緑陰樹の植樹を何度か提案した。第4回ではネッカー川右岸の写真事例を示して提案した。結論では、“植樹は不可能ではない”として『前向きに取組む』という方向性が示された。近い将来新潟のやすらぎ堤に1~2本実現したい。



ライン川支流ネッカー川右岸の緑陰(ドイツ) / 生田理弘氏撮影 1989年の欧州近自然河川工法視察ツアーで左岸から見た(相楽)

### ⑤川の魅力と畏れを知ることから

新河川法には、1/365日の水害対応の川づくりだけでは、平常時364/365日の川の魅力を閉ざし地域と川との関係が切れてしまう反省があったはず。地域住民による信濃川への日頃のかかわり、川の知水こそ洪水時の怖れを知り被害を最小限に留めることになる、と全国の仲間を確認しあったことを提案した。今回の整備計画でもそこには多くのページを割き地域とのかかわりの方針が書き込まれている。

全体に私の力量不足で具体的な方策提言は計画に書き込まれていない。ぜひ、川の整備時に、会員の皆様からも改善提案をお願いしたい。

副代表世話人 相楽 治

# report 2013年信濃川・千曲川の鮭の遡上報告

## ◆ 宮中取水ダムでは戦後最多の遡上

国土交通省信濃川河川事務所による信濃川・千曲川での鮭の遡上調査(9月11日～11月10日)が終了し、宮中取水ダムでは戦後最多の408尾(オス290尾、メス118尾)と、昨年より100尾以上多い記録となりました。

2009年～2013年 鮭の遡上状況

	宮中取水ダム	西大滝ダム
2009年	160尾 (♂97, ♀63)	2尾 (♂1, ♀1)
2010年	146尾 (♂96, ♀50)	3尾 (♂2, ♀1)
2011年	135尾 (♂93, ♀42)	35尾 (♂22, ♀13)
2012年	297尾 (♂163, ♀134)	12尾 (♂8, ♀4)
2013年	408尾 (♂290, ♀118)	6尾 (♂3, ♀3)

しかし、宮中取水ダムより約30km上流の西大滝ダムでは2011年に35尾の戦後最多の記録を誇りましたが、今年は6尾(オス3尾、メス3尾)の結果でした。残りの約400尾の鮭はどこへ行ったのだろうか。

### 1. 西大滝ダム下流の支川に遡上?

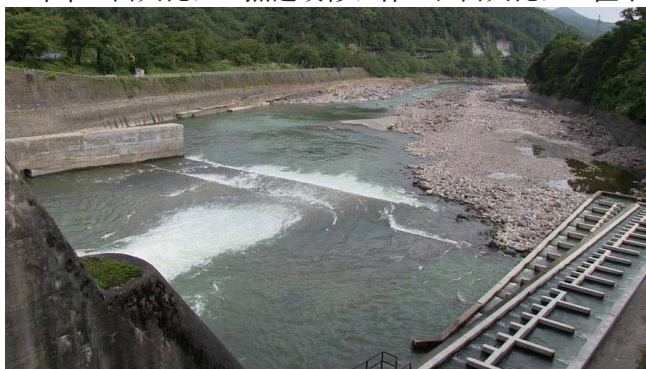
宮中取水ダム上流には「清津川」、「中津川」、「志久見川」の3河川があります。その河川に遡上し自然産卵した可能性があり、清津川、志久見川では鮭の目撃情報が寄せられています。

### 2. 今年遡上した鮭の放流した場所は

鮭は生まれ育った川の匂いを覚え、放流された場所近くまで戻ると言われています。今年宮中取水ダムに遡上した鮭の大半が、西大滝ダム下流で放流した稚魚が成長した可能性があります。

### 3. 西大滝ダム直下の河床低下による段差

昨年の西大滝ダム魚道改修に伴い、西大滝ダム直下



西大滝ダム直下に出た段差

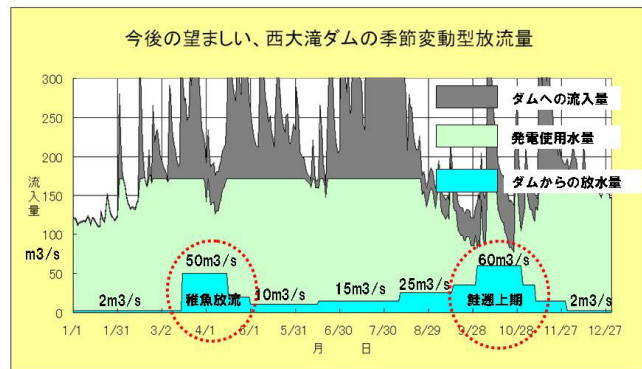
の河床が低くなりました。水量の少ない時はダム下流の床固めに水位差が出来て、鮭が遡上出来難い可能性が出ています。

### 4. 東電信濃川発電所放流口に鮭が停滞か?

2012年9月、東京電力信濃川発電所放流口にチェーン方式の迷入防止装置が設置されました。そのため、それ以上放流口に向かうことが出来なくなったとは思いますが、遡上期の鮭が本流と迷入防止装置付近に迷って停滞している可能性も考えられます。

### 5. 西大滝ダムからの季節変動型放流量の提案

これまで西大滝ダムからの維持流量0.26m<sup>3</sup>/sが、平成23年1月1日より20m<sup>3</sup>/sと大幅にアップされ河川環境は良くなりましたが、河川環境にとって必要な時に必要な流量になっていないのではないかと思います。



西大滝ダムからの季節変動型放流量案

雪解けの3～4月、鮭の稚魚が海に下る一時期は、発電用タービンに巻き込まれないようにより多く、夏場のラフティングには必要な水量、そして秋に産卵の為ふるさとの川に遡上する鮭のために多くし、冬場の時期はその分少なくする、つまり「川にとって必要な時にはより多くの流量を流す、2～60m<sup>3</sup>/sの季節変動維持流量案」を東京電力に提案して行きたいと思えます。

### ● 鮭のホッチャレを5尾発見

12月21日、西大滝ダム上の発電用流入口にて、ホッチャレ(川に戻り産卵後の鮭)が、12月の1日、2日、5日、7日、8日で5尾発見されたと長野より情報が入りました。短期間で5尾のホッチャレが見つかることは、その数倍の鮭が西大滝ダムを超えたことを意味しているものと思えます。

やはり自然は人間を超えた存在であることを実感し、河口新潟から長野まで鮭などの魚類が遡上できる本来の川にしたいと願っています。

世話人 加藤 功

この活動は三井物産環境基金の助成を受けています。

report

## ラフティング楽しめたらいいですね！ —信濃川での散乱ブロック撤去の試み、“遊び”への公金投入！—

2013年6月から7月にかけて、信濃川中流部十日町地区で、河道に散乱するブロックの撤去作業が行われた。下の図は、国土交通省信濃川河川事務所のホームページから引用したものであるが、「ラフティング楽しめたらいいですね！」、「この夏、ラフティングを楽しむ皆さんの笑顔が見れたらうれしいです。」という、柔らかく楽しいフレーズが踊っている。

た避けるという状況であった。少々ブロック点在中であれば、スリルが増してかえって良いともいえるのであるが、あまりに多すぎて危険といわざるを得なかった。



撮影：山田努氏（2009年9月19日）

このブロックは、護岸のために岸辺に置いたものが、洪水の激流で流されて、無用の長物になってしまったものである。従来このようなブロックは、舟などの水面利用がなければ、そのまま放っておかれるのが普通であったが、信濃川でも宮中取水ダムからの放流量が増え、今後はラフティングやカヌーが楽しめるので、私はこのブロックを撤去するように要望した。しかし、その時は、“遊び”には公金を支出できないという回答であった。

それから4年たって、この撤去に公金が支出されたのである。私は、自然の中での遊びは“からだ”と“こころ”をつくり、人間形成の原点であるので、こうしたことに公金を使うことに大いに賛成である。

江戸時代までの日本人は、大変“遊び”が上手で、大人も子どもも人生を謳歌していたと、幕末から明治初期に来日した外国人が一様にほめている。しかし、明治以降、富国強兵・殖産興業で、勤勉に労働することは称賛されたが、“遊び”は何となくうしろめたいことになってしまった。その結果が、「よい子は川で遊ばない」となり、“遊び”への投資は全くされなかったものであった。しかし、明治以降140年が過ぎ、やっと本来の日本人に復帰しつつあるように感じる。今後、“川遊び”への投資が増えることを期待している。

代表世話人 大熊 孝

十日町出張所便り

平成25年7月17日

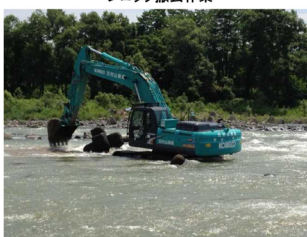
### ラフティング楽しめたらいいですね！

「十日町地区信濃川の安全な水面利用を考える会」第2回会合で撤去することを確認しました「水面利用に支障のあるブロック」の撤去作業は平成25年7月16日に完了しました。作業は、十日町市が主催する「ラフティングツアー」が平成25年7月22日から始まることから、それまでに作業を終えるようにと、作業員の皆さんも懸命に作業にあられました。また、作業途中においても十日町市の担当職員さんからも現地を確認いただきながら作業を進めました。

ほくほく線橋梁上流：ブロック撤去前後



ブロック撤去作業



撤去したブロックの一部



この夏、ラフティングを楽しむ皆さんの笑顔が見れたらうれしいです。



〈問い合わせ先〉  
信濃川河川事務所 十日町出張所  
TEL 025-752-2180  
FAX 025-752-6889

国土交通省信濃川河川事務所ホームページより

これはラフティングやカヌーの航行の邪魔になっていたブロックを撤去してくれたということであり、換言すれば“遊び”のために公金を使ったということである。これは画期的なことであると、私は感心している。

実は、2009年に宮中取水ダムの水利権が一時停止となり、信濃川に全水量が流れているときに、下の写真のように、私もラフティングを楽しんだのであるが、巨大なブロックが点在しており、避けたと思ったら次のブロックが目前にあり、慌ててこれをま

# 新潟水辺イベント情報

## ○鮭の稚魚市民環境放流

### 10万尾鮭の稚魚放流 & 子どもたちの発表会



【実施日】2014年3月15日(土)～16日(日)1泊2日

【参加費】11,000円(大人)6,000円(子供)(1泊2食、バス代、高速料金込、昼食代は各自負担)

【宿泊場所】北信州のパノラマひとりじめ!木島平温泉「パノラマランド木島平」

(長野県木島平村大字上木島3878-2 電話0269-82-3001)

【募集人員】35名

【申込締切り】2014年3月5日(水)

【集合】3月15日(土)午前7時

新潟駅南口プラウカ1近くのバスロータリー

【服装】濡れてもよく、暖かい服装・長靴

【主催】NPO法人新潟水辺の会

【申込先】世話人 加藤 功 電話025-230-3910

e-mail: ecoline@mvd.biglobe.ne.jp

## ■日程■

○1日目(3/15)

07:00 新潟駅集合(時間厳守)

07:10 新潟駅出発⇒関越自動車道⇒十日町市

10:20 千曲川(西大滝ダム下流)にて稚魚の市民環境放流 1万尾

11:30 千曲川湯滝温泉にて 稚魚の市民環境放流3万尾  
昼食 飯山市湯滝温泉にて(各自負担)

13:40 馬曲川にて稚魚の市民環境放流1万尾

15:00 木島平小学校にて児童発表会「鮭発眼卵からの育成と稚魚放流」

17:00 終了後、宿泊先へ

○2日目(3/16)

08:00 宿を出発⇒上信越自動車道⇒上田市

10:00 千曲川(上田市浦野川)稚魚の市民環境放流4万尾

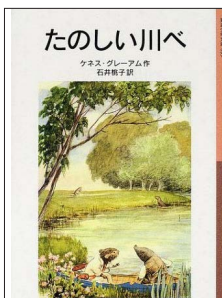
・蔵の街・須坂の30段飾りの千体雛祭り見学  
・昼食 須坂にて(各自負担)

14:30 信濃川(津南町)で稚魚の市民環境放流2万尾

15:20 終了後、新潟へ

※この催しは三井物産環境基金の助成を受けて実施します。

## 書籍紹介：ケネス・グレアム「たのしい川べ」



人里はなれた静かな川べで素朴な生活を楽しむネズミやモグラ、ヒキガエルたち。小さな動物たちが自然の中でくりひろげるほほえましい事件の数々を、詩情ゆたかに描いた田園ファンタジーの名作。

この本は1908年に出版されている。翻訳者・石井桃子(1907-2008)の翻訳は、翻訳と思わせないほど素晴らしい文章である。

ケネス・グレアム Kenneth Grahame(1859-1932)(著), E.H. シェパード(イラスト), 石井桃子(翻訳), 岩波書店 岩波少年文庫刊

紹介：代表世話人 大熊 孝

**編集後記：**最近、子どもたちに関わるイベントに参加しています。11月初め、「話し合い文化推進にいがた<sup>※1</sup>」主催のゆる〜いワークショップ「子どもたちの未来のために私たちができること」に参加してきました。会場が新潟市西区役所ということもあり、坂井輪地区の父兄の方々が多く参加していました。様々な分野の人が集まり、楽しく自由な話し合いの中で、今、子どもたちに関わる課題を探ろうという会です。1回目でもあり、具体的な答えまでは出せませんでしたが、色々な話の中で「挨拶」について、各グループで上がっていたのが印象的でした。世代に関係なく、挨拶が出来ない人が多くなっていると感じているのは私だけでしょうか。

2月8日(土)9日(日)に新潟市市民活動支援センター(新潟市中央区西堀6番館ビル3F)で「キッズフェスタ in 支援センター2014<sup>※2</sup>」が開催されます。次世代を担う子どもたちが「楽しく市民活動を体験出来るフェスティバル」です。昔の遊びコーナーなど、子どもたちが楽しめる様々な企画を用意しています。是非、ご家族連れで遊びに来て下さい。

今年も一年、水辺の会をよろしくお祈りします。

※1 <https://www.facebook.com/hanashiainiigata> ※2 <http://www.shimin-ouen.com/center/event/94.html>

編集人：森本 利

●発行：特定非営利活動法人新潟水辺の会

●事務局

〒950-2264 新潟市西区みずき野4-7-15 大熊 方 Phone 025-264-3191 Fax 025-264-3260

●ホームページ <http://niigata-mizubenokai.org> ●メール [info@niigata-mizubenokai.org](mailto:info@niigata-mizubenokai.org)

●会員数 個人会員168名、法人会員8団体、顧問7名、特別会員1名(2014年1月1日現在)